

高松大学紀要・雑報

研究授業「教育心理学」の実施

向居 暁

高松大学発達科学部

The reflection of an open class “Educational Psychology”

Akira Mukai

Abstract

This paper reports an open class of Educational Psychology conducted in the Faculty of Human Development, Takamatsu University on Dec 4th, 2006. The main topic of the lecture was “Educational evaluation”. Microsoft PowerPoint was used for presenting study materials. How to improve the lecture and classroom teaching in general was discussed by faculty members.

Key words : open class, educational psychology

1. はじめに

高松大学, および, 高松短期大学では授業改善の取り組みのひとつとして, 研究授業を定期的に実施している。本稿は, 高松大学発達科学部子ども発達学科で行われた「教育心理学」の研究授業の記録である。

1. 研究授業の実施

研究授業, および, 検討会は次の日程で行われた。

(1) 研究授業

日時 : 2006年12月4日 (月) 1校時

場所 : E202講義室

科目 : 教育心理学

対象：子ども発達学科1年生，教職免許取得希望の経営学部の学生

担当：向居 暁

(2) 検討会

日時：2006年12月4日（月）5校時

場所：E404演習室

2. 本講義の紹介と教育目標

「教育心理学の不毛性」といわれる問題に代表されるように，教育心理学は教育実践に貢献していないと批判されてきて久しい（例えば，福沢，1982）。本講義では，受講生が教育心理学の基礎的な事項を習得すると同時に，できるだけ実践教育を意識することができるように心がけて講義を行った。具体的には，「もし皆さんが先生になったら・・・」というような質問を頻繁に投げかけ，いくつかの事例を示すとともに，受講者に講義事項についての具体的なイメージ化を促し，そのような心理学の知識が教育現場でどのように役に立ちうるのかということを受講生自ら考えてもらえるように努力した。学生たちは自ら考える前に，さまざまな問いに対する「正解」や「模範解答」を教員に対して安易に求めがちだといった教員の声を，本学に赴任して以来よく耳にする。本講義では一貫して，将来「先生」と呼ばれる職業に就くことを目標としている受講生に対して，教育活動というものは現場で働く「先生」の創造性の賜物であり，具体的な指導法や現場での問題解決の方法について，「こうすればよい」といった単純なものはないこと，また，教育心理学を含む心理学の理論や研究がそのアイデアのベースになりうることを強調したつもりである。

高松大学2006年度シラバスにおいて，本講義は次のように紹介されている。

「教師は，乳幼児，児童の発達，学習状態を正しくとらえ，それに応じて指導することが求められています。本講義では，幼児，児童の知的能力（記憶，思考，学習）に焦点を当て，学習指導と評価についての基本的知識の獲得を目指します。また，特別な学習支援が必要な幼児，児童の学習過程についても，その特徴などを学びます。講義内容は，児童・生徒の性格理解，学習の基礎，やる気を高める方法，教育評価，教師の適性など多岐におよび，『心理学による教育方法の充実』を目標とします。」

また、同シラバスには、本講義の教育目標として次のように記載されている。

「将来『先生』と呼ばれるようになるときに必要となる教育心理学の基礎知識を身につけること、また、そのような知識をどのようにして生かすことができるかを常に考える態度を身につけることを目標とします。」

本講義のために使用したテキストは、豊田（2003）であった。講義終了時に、次回の講義内容に該当する教科書の範囲が担当教員から示され、受講者はその範囲を予習してくるよう求められた。

また、本講義はパワーポイントのスライドショーを利用して行われた。心理尺度などをのぞいては、スライド内容に関する資料は受講者に配布されず、また、教科書以外の内容も多く紹介したため、受講者は授業ノートを作成する必要があったと思われる。

講義終了時間の5～10分前には、毎回、「授業アンケート」と題したA4用紙が受講者に配布され、「本日の講義内容のまとめ」、「講義の感想」、および、「講義全体の改善点や講義内容の提案」を記入するよう求められた。この授業アンケートに記入された質問のうち、担当教員が重要だと判断したものについては次の講義でその回答が与えられ、また、提案などの意見はその後の講義全体の改善のための参考とされた。

3. 「教育心理学」の受講生

本講義の受講生は、発達科学部1年生全員（受講登録34名）と経営学部の教職関連免許取得希望者（受講登録51名）であった。発達科学部の学生は、小学校教諭一種免許状、幼稚園教諭一種免許状、保育士資格のいずれか（またはそれらの組み合わせ）の取得、経営学部の学生は、高等学校教諭一種免許状（商業・情報）の取得を目標としている学生であったと思われる。つまり、保育園児や幼稚園児から高校生までの幅広い年齢の子どもたちを対象とした教育心理学の講義が必要となる。このように受講生の希望する免許や資格の対象となる児童・生徒の年齢が幅広いことは、「実践教育」に重きをおいた本講義の実施を比較的困難にした大きな要因のひとつであると考えられる。また、初めての心理学関連の授業がこの教育心理学であるといった受講者も多くみられ、学問としての心理学の知識に触れたことのない受講者も多く含まれていたため、専門用語に頼らない講義を行う必要が

あった。

4. 「教育心理学」の講義内容

2006年度から担当する講義であったこともあり、シラバスに記載された通りに講義計画は進行しなかった。以下、実際に行われた変更後の講義内容と日程を記す。

- 第1回「オリエンテーション」(9月25日)
- 第2回「児童・生徒の性格の理解」(10月2日)
- 第3回「児童・生徒の知的能力の理解」(10月16日)
- 第4回「児童・生徒の知的能力の理解2」(10月23日)
- 第5回「学習の基礎」(10月30日)
- 第6回「学習の動機づけ」(11月6日)
- 第7回「学習の動機づけ2」(11月13日)
- 第8回「学習指導法の基礎」(11月20日)
- 第9回「学習指導法の基礎2」(11月27日)
- 第10回「教育評価」(本時)(12月4日)
- 第11回「教育評価2」(12月11日)
- 第12回「家庭学習の指導」(12月18日)
- 第13回「教師の適性」(1月15日)
- 第14回「障害の理解と学習支援」(1月22日)
- 第15回「テスト」(1月29日)

なお、講義内容はテキストにしたがって構成された。また、第14回講義「障害の理解と学習支援」については、テキストに掲載されていなかったため、担当教員が桜井(2004)などをもとに講義内容に関する資料を作成して受講生に配布した。

5. 研究授業の概要

本時の講義内容は「教育評価－効果的な学習を促す適切な指導のための評価－」であった。「教育評価」のトピックについては、第10回と第11回の2回にわたって講義がなされた。「教育評価」についての講義の学習のポイントとして「様々な教育評価を学習すること」、「評価法の長所と短所を学習すること」、および、「指導に生かす評価を学習すること」。

と」の3点があげられた。

本時講義内容を簡単に記すと、まず「教育評価とは」からはじまり、「教育評価の種類」について説明し、その後、「相対評価」、「絶対評価」、「個人内評価の長所と短所」をそれぞれ説明し、これら3つの評価の関係を図を用いて解説した。また、評価の時期によって教育評価を分類し、「診断的評価」、「形成的評価」、「総括的評価」について解説した（本講義で使用したパワーポイントのスライドは付録を参照）。これらの講義内容は、第11回講義「教育評価2」の「評価の具体的な方法（テスト）」、「テスト結果の分析と利用」、「望ましい評価の視点」につながる内容であった。

担当教員、および、ほとんどの受講生にとって初めての研究授業であったため、普段とは多少違った雰囲気を感じられた。講義の全体的な雰囲気を形成する要因だと思われる担当教員と受講生間のやりとりも普段よりは少なかつたように感じた。

6. 教育心理学の研究授業に対する参観者からのコメント

この項では、検討会において各教員から出された主要な意見を紹介する。コメントの観点については、本学の研究授業で使用されている「授業参観記録」の様式に従っている。

(1) 授業を積極的に評価できる点

①教育内容に関して

- ・現在もなお「評価されている」立場にいる学生たちに、「教育評価」ということをわかりやすく説明していた。
- ・「教育評価」というテキストの該当部分がわかりやすくまとめられていた。
- ・教育評価について具体的事例を挙げて、系統的に指導され、教育評価とは何か、評価の課題やその長所・短所などがしっかりとおさえられていた。

②授業方法に関して

- ・達者な話術で、笑顔を見せながら、パワーポイントを用い、教科書との関連を説明しながら、授業がスムーズに展開された。
- ・パワーポイントの効果的な使用、学生の筆写を誘導すること、質問を投げかけ興味を喚起するなど授業への参加を促進する工夫と努力がなされていた。
- ・パワーポイントの資料が整理されていて、淡々と進行されているようだ。
- ・スライドなど視覚に訴える授業は学生にとってもよく理解できたのではないか。

③その他

- ・端正な形式と人間的な温かみとのバランスが取れたよい講義であった。
- ・授業の準備がよくできており、一口に言って親切丁寧な授業であったと思う。
- ・大変落ち着いた雰囲気での授業で学生の反応もあるし、よい学習環境で学生が授業を受けていると感じた。

(2) 授業の改善にかかわる点

①授業内容に関して

- ・「実際の授業や学校現場とこの講義の内容とをどう結びつけるのか」また、「現場が全人的評価を重視した方向に向かうとき、どう結びつけるのか」などの疑問が残る。入門ということでもそこまで望む必要はないかもしれないが、一つ二つの具体的事例はあったほうがよいと思う。
- ・具体例を提示することに関しては工夫が可能かもしれない。
- ・「自分が教師になったら、どのような方法で、あるいは観点で成績をつけるのか、つけなければならないのか」が今一つ、学生にはイメージできなかったような気がする。
- ・教員養成のためのカリキュラムについて考える必要があるのではないか。

②授業方法に関して

- ・やや早口であった。後半、一本調子となったので、その点を是正すればもっとメリハリのある授業になっただろう。
- ・パワーポイントの資料と教科書の情報以外は得ることができない。本授業の内容が本当に学生にイメージできたのか？
- ・わかりにくいところ、大切なところはスライドを繰り返せばよい。

③その他

- ・話が脱線するのは特に気にしなくていいのではないか。
- ・教育現場で求められている教員の資質・能力について、大学としてどう取り組むかも大切であると思う。

(3) 授業全体の感想

- ・いい授業であった。多人数相手の講義であったが、わかりやすく、また、達成感の得られる授業であったと思う。
- ・大学の講義らしい講義だった。テキストを理解させ、一人で読むだけでは得られない付加を与えつつ、質問と筆記の作業で授業への参加を促す仕組みは、とても参考になった。
- ・しっかりした、学術的な裏づけによって進められ、落ち着いた雰囲気の中でスムーズに進められた授業であった。
- ・大学の授業は学生時代を除いて、初めて参観した。新鮮な気持ちで参観した。

7. まとめ—今後の課題—

本研究授業は、担当教員にとって、客観的に講義を見直すために大変よい機会だったと考える。本時講義内容であった「教育評価」のみにかかわらず、教育心理学の講義全体に対して、経験豊富な諸先生方の意見を伺うことができ、今後の講義を計画し、準備する際に大変に参考になった。

パワーポイントを使った講義形式は、高い評価を受けたと感じた。講義内容を、図や写真などを多用し、視覚的に呈示することにより、受講生の理解の促進につながる学習項目も少なくないと考える。ただ、パワーポイントのスライドを利用した講義は、その準備に多くの時間を費やしてしまう。一方、一度準備してしまえば、もちろん教育現場や時代の変化に即した内容の微調整は必要であるが、次年度の講義に再利用可能であることや、毎回の講義での板書が必要ないことなどの利点もある。今後もパワーポイントを有効利用できるように講義を進行したいと考える。

話し方に関して、早口になることなどが指摘された。実際に、講義内容を時間内に収めることを考えると、特に講義後半に早口になってしまうことが多々ある。講義の全体的な雰囲気を形成すると思われる受講生とのやりとりを大切にしたいと考えているため、話が横道にそれることも少なくない。また、発達科学部の1年生が多くの受講者を占めるため、早いうちに授業ノートなどをしっかりと取る習慣をつけてもらいたいと考えており、その結果、受講生が各スライド内容をノートに書き写す間、スライドの進行を待つこともしばしばである。今後は時間に余裕を持ち、少々話が脱線しても、また、受講生がしっかり授業ノートをとっても、講義時間内に収まるような余裕もった計画を立てたほうがよいと考える。

講義内容に関して、教育現場とのつながりが不明瞭だという指摘を多く受けた。また、そのためにはもう少し具体的な事例を示すことが必要ではないかという意見もあった。先にも述べたように、本来、私自身、教育活動というものは一つだけの正解があるものだと考えていないため、あまりにも具体的な例を挙げて、それを受講生が「正解」だとも考えてもらっては、理論ベースの講義をしている意味が薄れると考えている。ただ、指摘のようにその理論の重要性を、具体例を通して理解してもらわなければ、受講生の記憶にも残りにくいだろうし、講義の目標としている「実践教育の意識」につながらないかもしれない。できるだけ受講生の創造的な活動の余地を残しながら、ある程度具体的な例を示し、理論や研究と教育現場のつながりを理解してもらえるような講義内容になるよう工夫する必要があるだろう。

最後に、研究授業に協力いただいた受講生、ならびに、諸先生方に心からお礼を申し上げます。

引用文献

- 福沢周亮 (1982). 教育と教育心理学 福沢周亮 (編) 現代教育心理学 教育出版 pp.1-15.
桜井茂男 (編) (2004). 楽しく学べる最新教育心理学－教職にかかわるすべての人に－ 図書文化
豊田弘司 (2003). 教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－ 小林出版

教育心理学

第10、11回 教育評価
 —効果的な学習を促す適切な指導のための評価—

教育評価(p.127~)

- 児童・生徒の学習の程度や、教育方法(教授法など)の適切性を評価する方法やシステム
- 学習のポイント
 1. 様々な教育評価を学習する
 2. 評価法の長所と短所を学習する
 3. 指導に生かす評価を学習する

教育評価の種類

- 「評価の基準」による分類
 1. 相対評価
 2. 絶対評価(到達度評価)
 3. 個人内評価
- 「評価の時期」による分類
 1. 診断的評価
 2. 形成的評価
 3. 総括的評価

A君のテストの点数

- A君は数学のテストで70点取りました。
- さて、この点数は「よい」点数なのでしょうか？
⇒他の人と比べたらもっとわかるかも・・・
- A君は国語のテストでも70点取りました。
- さて、数学と国語の成績は、どっちがよかったのでしょうか？
⇒点数以外の指標を使えばわかるかも・・・

相対評価・・・他人と比べる

- 個人が属する集団の標準(例：平均点)を基準として評価する方法

A君の成績はどうなんかな？

- A君の数学=70点
- クラスの平均=60点
- ⇒A君の数学の偏差値=62
- ⇒5段階評定だと「4」
- A君の国語=70点
- クラスの平均=69点
- ⇒A君の国語の偏差値=52
- ⇒国語よりも数学のほうがよい

相対評価の長所(p.128)

1. 教師の主観に左右されず、客観的な評価ができる。
2. 集団(学級、学校)内の位置づけが明確である。
3. 教科間の成績の比較ができる。

相対評価の短所(p.128~)

1. 目標に達したかどうかわからないので、指導の適否を判断しにくい。
2. 児童・生徒を目標に向けて動機づけることが難しい。
3. クラスメイト同士の過度の競争を刺激する可能性がある。
4. 標準学力検査以外は、学校間や学級間で比較ができない。 など

またA君のテスト

- 数学(二次方程式)で70点取ったけど、これで二次方程式は「理解した」と判断してもいいの？
- よくみてみると、計算はほとんどあってたけど、文章題で間違いが多いみたい・・・

9

絶対評価・・・教育目標と比べる

- 教師によって設定された教育目標やねらいを基準として、それに到達したか否か、またはどの程度まで到達したかを評価する方法
 - 達成度評価、到達度評価、目標達成効果とも呼ばれる。
- 目標に到達した⇒○ 到達しなかった⇒×
- 目標達成の程度を評定する(5段階評定など)
- 教師の目から見て、「優・良・可・不可」、「できる、もう少し、がんばろう」

10

絶対評価の長所(p.129)

1. 目標に達したか否かがわかるので、授業法の適切性をチェックできる。
 - ⇒ 以後の指導計画の立案に有効
2. 児童・生徒を目標に向けて動機づけることができる。
3. クラスメイト間での過度の競争を避けることができる。
4. 目標の到達基準に照らして評価するため、他の学級や学校との比較ができる。
 - ⇒ 転校しても情報交換できる

11

絶対評価の短所(p.129)

1. 客観的な評価基準の設定が難しく、教師の主観的な評価になりやすい。
2. 児童・生徒を相互に比較したり、教科間の成績を比較できない。 など

12

さらに再びA君のテスト

- 数学で70点取ったけど、A君って前に比べてがんばったの？
- 理科のテストは100点やったけど、社会は20点やった・・・A君って得意、不得意があるのかな？

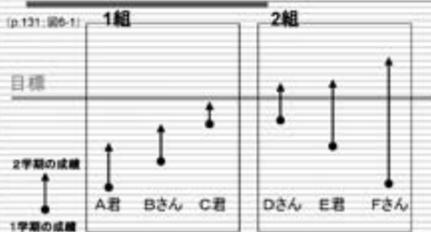
13

個人内評価・・・その個人自身と比べる

- 個人ごとに基準を設定して評価する方法
 - 個人内差異評価(横断的評価)・・・個人の他の能力と比較する
 - 個人の長所・短所をとらえられるので個別指導に有効
 - ⇒ 基準が主観的になりやすい
 - 努力度評価(縦断的評価)・・・個人の過去の能力と比較する
 - 個人の努力を評価するので学習意欲を高められる⇒自己満足におちいりやすい
 - ⇒ 個人差に応じた指導はできるが、教育目標への到達、クラス内での位置がわからない

14

3つの評価の関係(絶対評価)

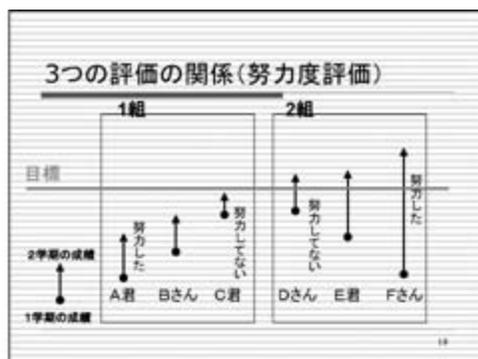
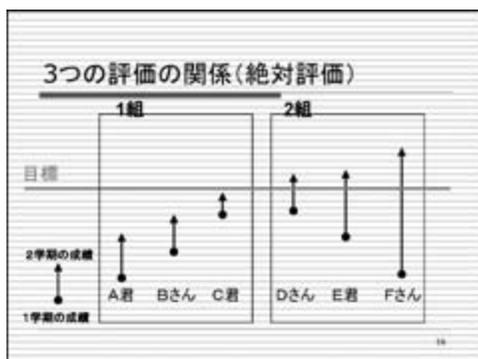


15

3つの評価の関係(絶対評価)



16



相対評価と絶対評価の比較1

<p><input type="checkbox"/> 相対評価の短所</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 目標に達したかどうかわからないので、指導の適否を判断しにくい。 2. 児童・生徒を目標に向けて動機づけることが難しい。 3. クラスメイト同士の過度の競争を刺激する可能性がある。 4. 標準学力検査以外は、学校間や学級間で比較できない。 	<p><input type="checkbox"/> 絶対評価の長所</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 目標に達したか否かがわかるので、授業法の適切性をチェックできる。 2. 児童・生徒を目標に向けて動機づけることができる。 3. クラスメイト間での過度の競争を避けることができる。 4. 目標の到達基準に照らして評価するため、他の学級や学校との比較ができる。
--	--

相対評価と絶対評価の比較2

<p><input type="checkbox"/> 相対評価の長所</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教師の主観に左右されず、客観的な評価ができる。 2. 集団(学級、学校)内の位置づけが明確である。 3. 教科間の成績の比較ができる。 	<p><input type="checkbox"/> 絶対評価の短所</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 客観的な評価基準の設定が難しく、教師の主観的评价になりやすい。 2. 児童・生徒を相互に比較したり、教科間の成績を比較できない。
--	--

評価の注意点

- 相対評価、絶対評価、個人内評価にはそれぞれ一長一短がある。
- どれがよりすぐれているか考えるよりは、それらの長所を生かして、場面に応じて使い分けすることが重要。

評価の時期による分類(p.132)

1. 診断的評価
2. 形成的評価
3. 総括的評価

⇒図6-2参照

診断的評価(p.132)

- 学習者のレディネス(学習準備状態)の情報を得るために、学期や単元の前に実施される。
 1. 指導計画を立てるために
 2. 学習困難児の発見と対応の計画のために
 3. 学級編成やグループ分けのために

形成的評価(p.134)

- 学期や単元の途中で出される評価
 1. 学習活動の自己調整をさせるため
 2. 学習活動の強化=次の活動に向かうエネルギーを、学習者に付与するため
 3. 学習の問題点の診断=「何がわからないのか」を知るため
 - ⇒指導方法の適切さの判断や補充指導が必要なものの発見
- ただし、学習の目的や目標などの理念がかたまっていないと、曖昧なものになり、役に立たない!

形成的評価の背景

- ブルームの完全習得学習と教育目標の分類学 (p.119; p.134)
 - 完全習得学習＝どんな子どもでも教育条件を整えて指導すれば、教育内容を完全に習得し、教育目標を達成できるという考え
 - 教育目標の分類学＝教育目標を教材の内容と能力の面から分析してより細分化し、より具体的な行動目標を設定すべきであると主張

25

総括的評価(p.135)

- 内容全般について、良かったか悪かったかの成績を決定する。学期や単元の最後に行われる。
 - 事後評価とも呼ばれる
- 診断的評価(事前評価)、形成的評価、総括的評価については、表6-2(p.136)参照

26

注) これ以降のスライドは次回(第11回)講義内容のため省略した。

高松大学紀要
第 49 号

平成20年 2月25日 印刷

平成20年 2月28日 発行

編集発行 高 松 大 学
高 松 短 期 大 学
〒761-0194 高松市春日町960番地
TEL (087) 841 - 3255
FAX (087) 841 - 3064

印 刷 株式会社 美巧社
高松市多賀町 1 - 8 - 10
TEL (087) 833 - 5811